

“出会い”を制度に預けて

●やってみること

- ① タップル(出会い系アプリ)を使って“出会う”
- ② タップルで出会った人を共同者として藝大の授業、課題発表の場に呼ぶ

●問い

○タップル-出会い系サイト/アプリという制度について

- ・本来、偶発的であったはずの出会いは、アルゴリズムと経済活動に組み込まれ始めている。
- ・都市化・個人化が進み、自然発生的な出会いが成立しにくくなった現代に対応する形で、「マッチングアプリ」という、出会いを制度化・商品化する装置が普及した。
- ・タップルは、「趣味」や「共通点」でマッチングする仕組みとなっており、つまり、既存の嗜好・属性に沿った「出会いの効率化」を目指している。ここで成立する出会いは、「本当に他者に出会う」というよりも、自分の許容範囲内の他者を消費する行為に近い側面を持つ。
- ・「出会い」はもはや、最適化された自己充足プロセスに堕していないか。

○「友達、彼氏彼女を“作る”」という言い回しについて

- ・恋愛のパッケージ化、「友達を“作ろう”」「彼氏彼女を“ゲット”しよう」と人々が謳うこと。それは社会全体が出会いや関係性を「商品」として扱っていることの現れではないか。
- ・人々は、友達や彼氏彼女というものを、自分の所有物や、成果物のように無意識に考えてしまっているのではないか。そこまでではなくても、友達や彼氏彼女を、自分の“拡張”として作り上げる、そのような意図があるのではないか。

○出会いとは何か。

- ・友達活動は、単なる消費行動に過ぎないのでは。
- ・経験のシェア、思い出のストック、SNS での見栄えといった、「自己の物語の素材」として他人を利用している構造があるのでは。
- ・「楽しい経験」が欲しい、「思い出」が欲しい、そのために「友達」や「彼氏彼女」が必要、という順番になっていることが多いのではないか。
- ・「特別な仲間」というのも、その「特別」という言葉の中に、消費欲望や自己満足の気配を感じてしまう。
- ・お互いが自己満足の、WIN-WIN が成立すれば、それでいいのか。それを目指していいのか。
- ・純然たる出会いとは、ただ偶然、街中ですれ違うこと、それだけかもしれない…。

●目的

- ・「出会い」が偶然性から制度へと移行している現在、あえてその制度（＝マッチングアプリ）を利用し、内部からその不自然さ・人間関係の形成の仕方を体験する。
- ・「友達、彼氏彼女を“作る”」という、言語や、関係性を商品として扱う社会構造の中で、他者と対等な関係＝共同関係を築くことは可能かを試す。
- ・「そもそも出会いに向いていない」と自覚している自分が、出会いを効率化・制度化するマッチングアプリという場に意図的に入り込むことで、制度が求める人間像に自分が適応できない様子を記録する。

●手法

- ・タップルに有料会員として登録する。
- ・実際にマッチした相手と、短期間でデートを実施。
- ・デートの過程では、フィールドノータン的に観察を行う：相手のリアクション、自分の心理変化、間合いの取り方
- ・デート後、課題協力（藝大への同行）を打診。
- ・了承されれば、藝大授業当日に同行してもらう。
- ・もし不成立でも、そのプロセス自体を含めて記録・発表対象とする。

●結果

① タップルへの登録

- ・タップルの料金体系は、女性は基本無料、男性は月額 3,700 円～となっている。
- ・今回は、学生ユーザー限定機能「タップル Student」に新規登録することで、2025 年 4 月 1 日～25 日の期間中に開催されていた学割キャンペーン（約 50% オフ）が適用され、月額利用料を 2,400 円に抑えることができた。
- ・タップル Student に登録すると、プロフィール上に大学名（東京藝術大学）が表示される仕様となっている。
- ・ユーザーに誤解を与えないよう、課題目的での利用であることをプロフィール欄に明記した。プロフィールとして記載した文言は以下のとおり。

東京藝大でアートを学んでいます。

今、“やるつもりのなかったことをやる”という課題に取り組んでいます。

誰かと出会うこと、それ自体が作品になる可能性を探していて、もしよければお茶でもしながら、そんな話ができたらいいなと考えています。

- ・タッブルは自分の顔写真を1～3枚、趣味や動物、旅行先などの写真を複数以上登録できる。今回は以下の自撮りと、過去に「自己紹介」という課題で制作した自画像の2枚を登録した。



- ・加えて、年齢や所在地、身長、飲酒・喫煙の頻度、デート時の費用負担の希望（割り勘、男性が多く払うなど）といった詳細な項目もプロフィールに入力する必要があった。

② マッチング

- ・マッチングに至る前に、まず女性ユーザーのプロフィールカードがランダム(?)に提示され、それを「いいかも」または「いいいち」に分類する操作を40人分行う必要がある。
- ・この操作は「ブーストタイム」や「今だけたくさんスワイプできます」といった文言とともに表示され、大量スワイプを促す仕組みとして初回利用時に必ず体験することになる。
- ・表面上は単なる導入プロセスに見えるが、この最初のスワイプ履歴が、ユーザーの趣味嗜好の傾向を学習する仕組みに接続されていると考えられる。つまり、ここでの選択が、以降に表示されるマッチ候補に影響を与える可能性が高い。
- ・自分が「いいかも」に選別した相手には、自分のプロフィールが「いいかも」したユーザーとして表示される仕組みになっており、双方が「いいかも」し合った場合に初めて「マッチング」が成立し、メッセージのやりとりが可能となる。
- ・私は、アートの活動に理解がありそうな人や、年齢が近そうな人に偏って「いいかも」を選んだ。
- ・その行為は、課題のために人を選ぶという、対象化・道具化的なふるまいであり、それはどう考えても正しいこととは言えないという葛藤を感じた。
- ・結果的に約10人とマッチングが成立し、そのうちの2人とメッセージのやり取りまで進んだ。

③ メッセージ

Mさん

- ・プロフィールによれば、埼玉の大学に通う19歳の学生で、趣味はバレエとのことだった。
- ・メッセージのやり取りの中で、プロフィール写真の1枚がうさぎだったことに触れたところ、そこからお互いに動物が好きだという話題へと自然に広がった。
→ただし、本当にどれほど動物が好きだったのかは、お互いに定かではなかった。今思えば、私も相手も、単に話を合わせていただけなのかもしれない。
- ・私はやり取りの中で、「猫カフェのような場所に行ってみませんか」と提案し、さまざまな動物と触れ合える施設である「アニミル」（お台場）を候補に挙げた。
- ・結果、4月26日（土）16:30にアニミルへ一緒に行く約束を取り付けることに成功した。

Aさん

- ・プロフィールによると、板橋区在住の18歳で、美容系の専門学校に通っており、アニメやディズニー映画が好きとのことだった。
- ・アニメの話題で会話が盛り上がり、Aさんがコンセプトカフェによく行くという話から、私も興味があると伝えたところ、5月17日に開催される「推しの子」のコンセプトカフェに一緒に行くことに決まった。
- ・ただしそれでは課題発表には間に合わないため、もっと近い日程で会うことも検討できないかと思い、アニメ鑑賞や映画館に一緒に行くのはいかがでしょうかと提案した。
- ・「ドラえものの新作を観に行こう」と提案したところ、Aさんも快諾してくれた。
- ・その後、近い日程として4月27日（日）の16時以降が挙げられ、その日に決定。ただし、希望した時間にはドラえものの上映がなかったため、代わりに16:35から上映される『ウィキッド ふたりの魔女』を提案し、同意を得た。
- ・結果として、4月27日（日）16:00にTOHOシネマズ新宿で待ち合わせし、『ウィキッド ふたりの魔女』と一緒に観に行く約束を取り付けることに成功した。

④ デート

4月26日（土） Mさん

◇計画

- ・16時30分に、アニミルに集合。合流後、90分パック（2,530円）で動物とのふれあいを楽しむ。
- ・その後、アニミルのあるデックス東京ビーチシーサイドモールの隣に位置するアクアシティお台場内のモンスーンカフェで軽食をとって解散。
- ・当日はあくまで「デート」として成立させることを目的とし、藝大への同行依頼は後日行う。

◇事件

- ・当日の朝、Mさんとはメッセージ上でたわいのない会話をし、「今日はよろしく」という挨拶を交わした。

- ・ところが集合時間の2時間前、14時30分に家を出ようとした際にタップルを確認したところ、Mさんとのメッセージ欄が消えていることに気付いた。
- ・タップルでは、相手にブロックされるとメッセージが消え、アカウントが「退会済み」と表示される仕様になっている。そのような状態になっていたため、ブロックされた可能性が高いと判断した。

◇実施

- ・結果として、一人で当初のデートプランを実行することにした。
- ・相手を想定してプランを立て、内心では緊張もしていたため、ブロックされたことはショックであった。しかし同時に、せっかく立てたプランを相手不在のまま遂行するというのも、出会い故のものだし、また制度の都合に則らない姿勢を表せると考え、実行した。
- ・お台場には昔付き合っていた人と来た記憶が残っていて、風景を見る度にその記憶がよみがえるので、少しセンチメンタルになった。

▶アニミル

- ・アニミルに着くと店員さんに「一人ですか」と少し間抜けな顔で聞かれ、愉快的注意事項の案内動画を一人で見せられた。ワンドリンク制だったのでドリンクメニューの一番上にあった宇治抹茶ラテを頼んだ。
- ・アニミルは、犬と猫のエリアと、ふくろう、みみずく、ハリネズミ、アリのエリア、フェレットのエリアの三つに分かれており、私は90分のほとんどをふくろうとみみずくのエリアで過ごした。
- ・犬猫のエリアに人が多く滞在していて、犬猫も併せて10匹くらいいたと思うから密度がやばかった。(あとまじで臭い)



- ・これは人と初デートで来るような場所ではないと感じ、相手が居ないことに少し安心した。
- ・犬猫は人間がオプションで買って与えてくれる餌にしか興味がなくて、餌がないとわかるとすぐに立ち去るし、餌を持っている人が居ると獣のようにがつく獣臭さに、あまりかわいいとは思えず、冷めた。

- ・フクロウやみみずくもまた、人間それ自体には興味なさそうであったけれど、外の景色を眺める余裕とか、落ち着きを感じて、そこに居ることの安心感があった。



→
カラフトフクロウ
せんべい さん

- ・フクロウコーナーにあまりに長くいるので、店員さんが度々そのフクロウの名前であるとか、生息地域についての話をしてくれて、また餌やり体験などもさせてくれた。でもそこにあった語彙は全て用意されていたものだったと思うので、どこか切なかった。
- ・せんべいというフクロウが居て、そいつは顔がせんべいのようなからそのように名付けられたらしく、テキトーだな、と思ったが、自分の名前だって、「岳研←山を研究してほしい」という終わった名付けられ方だったので、仲間だ、と思い直した。
- ・せんべいに生肉をピンセットであげるとき、ピンセットを通じてせんべいの嘴の感触を得て、少し心が動いた。
- ・入場時、フェレットかハリネズミの餌に交換できるコインを無料で二枚もらえるので、いつ何に使うか迷っていたが、ハリネズミは眠っていて餌をあげても反応しない様子を見たので、とりあえず一枚フェレットに使うことにした。
- ・フェレットはよく噛んでくるからということで、手袋をさせられて椅子に座わった。
- ・膝の上に小さめのカゴを乗せられて、その中になつという女の子のフェレットを入れてくれた。
- ・ちいさい器に入ったペースト状の餌をスプーンですくってあげる。目の前でちっちゃいやつがうごめいて、餌を食べているというのが可愛かった。そういえば目を合わせたりはしてくれなかった。そう思うと寂しいけど、とにかくまたスプーンをつたってフェレットがかみかみしてくれるその感触がうれしくて、余ったもう一枚のコインで餌をお代わりして、なつと一緒にいられる時間を伸ばしてもらった。
- ・店員さんは私が餌をおかわりしたことに喜んでくれて、器の中のペーストの餌の量を3倍くらいにしてくれたので驚いた。ゆっくりなつとの時間を楽しんでいたら、写真を撮りますよって言って

くれて、お願いした。なつを見つめている自分の写真をもらった。

・抹茶ラテは量が多く、90分で飲み切るのは大変だったけれど、おいしかった。



→なつと僕

▶モンスーンカフェ（ChatGPT に話しかけたもの）

あとモンスーンカフェに行ったんだけど、そこまでの廊下というか道というか、ディズニーランドのカリブの海賊を思わせる、洞窟を再現したおしゃれな道になっていてすごかった。モンスーンカフェはアジア多国籍料理店で、店内もおしゃれでね。料理も比較的リーズナブルだったからよかった。けどドリンクが来てからご飯が来るまで20分くらいあったかな。その時間、僕はずっと店内の写真を撮るか、前のカップルが楽しそうにしているのをみてた。隣にくるはずだった子が来てたら、楽しく話せたんじゃないかと思ったけど、別に寂しいとかじゃなかったかな。料理は美味しかったし量も多くて良かった。グアバジュースっていうよくわかんない飲み物を取りあえず頼んでみて飲んでたんだけど、まあまあおしかったよ。グレープフルーツっぽかったかな。ご飯食べたあとモンスーンカフェの入ってる施設を散策したんだけどいろんな施設が入ってて、たこ焼きミュージアムとかお祭り風の道とかがあったかな。ここを歩いている時、ああ誰かと一緒に来てたら楽しかったかもって思った。そのあと帽子屋さんで帽子を見て、試着したら似合ってた、やっぱり僕は帽子似合うんだなって一人で試着ごっこしてました。でも一個6000円以上するので諦めて、帰った

アニミルでもモンスーンカフェでも、「一人ですか？」とポカンとした顔で店員に聞かれたのが印象深かった。どちらも、誰かと共有することを前提とされた空間だった。そこを、一人で通り過ぎた。



→モンスーンカフェの店内

4月27日（日） Aさん

◇計画

- ・ 16 時 00 分に TOHO シネマズ新宿に集合し、合流後はフード売り場の列に並びながら上映まで歓談する。
- ・ その後、16 時 35 分～19 時 00 分 上映の『ウィキッド ふたりの魔女』を鑑賞し、終了後はカフェに入って映画の感想やお互いのことを話す。
- ・ 当日はあくまで「デート」として成立させることを目的とし、藝大への同行依頼は後日行う。

◇実施

- ・ 15 時 50 分、TOHO シネマズ新宿に到着。日曜の夕方で、「マインクラフト」や「名探偵コナン」、そして「ウィキッド ふたりの魔女」の上映が重なっており、館内は非常に混雑していた。
- ・ 早めに到着した旨を相手に伝え、「少し遅れそう」と返信が来た。上映時間が迫っていたため、合流前にフード売り場の列に並び、ポップコーンを買っておこうと思い立った。ドリンクをどうするか尋ねると、「ウーロン茶」と返ってきたのが 16 時 15 分頃。だがその時点で、まだ列の中腹にいた。
- ・ 16 時 20 分ごろ、相手から到着したとの連絡。
- ・ 結局、フードを購入できたのは 16 時 37 分で、すでに上映時間を過ぎていたが、本編前に 15 分ほど予告編が挿入されることを事前に伝えていたため、お互いに焦らずに合流し、シアターへ向かった。
- ・ 映画が始まるまでの間、シアターへの道のりや劇場内ではあまり自然に会話できず、ややぎこちない空気が流れた。
- ・ ポップコーン（L サイズ）を二人で分け合ったことは、個人的にとっても良かった。映画館ではお互いの顔を見ることがない。だからこそ、隣でポップコーンを食べながら映画を観るという距離感

に、かつて彼女がいた頃の感覚がふとよみがえって、少し懐かしさを感じた。

- ・相手は「タップルで会うのは君が4人目」と話していて、みんな友達の様な関係になれたと言っていた。僕のことも「友達になれた」と言ってくれたけれど、なぜか申し訳ない気持ちになってしまい、自分で自分を卑下してしまった。
- ・全体的に相手は終始落ち着いた、ある意味で冷めたような雰囲気、こちらに明確な興味があるようには感じなかった。
- ・映画の中で、魔女グリンダに好かれる白人の男性キャラクター（フィエロ）について、「ああいう男になりたいと思わないの？」と尋ねられた。その言葉からは、優しくてイケメンで筋肉質な“理想の男像”が前提にあるように感じた。
- ・僕は「そうはなりたくないな」と応じて、「それだったら、西の魔女になって平和を脅かすほうがいい」と半分冗談のように言ったら、「最悪」と笑っていた。
- ・相手の子は、「素が出ると悪口が多くなる」と自己分析していた。だから僕も「わかる」と返し、「僕もヴィランなんだよね」という流れで、西の魔女になると言ったつもりだったけど、今になって思えば、彼女にとって“悪口が多くなる”というのは、理想像と他人を比べて蔑むようなことを意味していたのかもしれない。そう考えると、僕の応答も、Aさんの感覚にズレたまま届いていたように思う。

◇藝大への同行依頼

- ・デートの翌々日、右のメッセージを送信した。

こんにちは！
この前は映画ありがとうございました。あらためて、会ってくれて本当に嬉しかったですー！

少し突然で恐縮なんだけど、実は明日か明後日の午前中に、藝大の授業で発表があって、「やるつもりのなかったことをやってみる」というテーマでフィールドワークをしていて、■■■■と会ったことや話したことも、その流れの中に含まれてるんです。

そこで、もし可能ならいいんだけど、授業の場に共演者として少しだけ一緒に来てもらえないかなと思っていて.....。
ただ横にいてもらうだけでもいいし、こちらから何か求めることはありません！
無理なら全然大丈夫なので、気が向いたら返事をもらえると嬉しいですー！

14:57



ごめん！どっちもバイト入ってる😓

16:01

22:28

大丈夫！ありがとうねー！

●分析・考察

① ひとりデート、動物たちとの出会い。 M さん

相手にブロックされたことで、私は一人で”デート”をなぞることになった。

それは本来、他者と共有することを前提とした時間であり、誰かのために思って用意されたプランだった。けれど、その「誰か」は現れなかった。しかし、私はその行動を取り下げることせず、むしろ制度が意図しなかった“ズレ”として、そのプランを一人で遂行した。

アニミルで出会ったのは動物たちだったが、彼らもまた、明確な利害のもとで配置された存在だった。犬や猫は、来場者が買った餌にだけ反応し、それがないと興味を示さない。フェレットやフクロウも、人間に飼われ、「ふれあい」の演出に組み込まれていた。私が彼らに触れられるのは、料金を支払い、コインを差し出し、餌を媒介としたときだけだった。つまり、私は人間の“誰か”に出会うことはなかったし、その代わりに出会った動物たちもまた、制度の中で私に“与えられた存在”でしかなかった。どこへ行っても「出会い」は、あらかじめ想定された心の動きをパッケージとして売られていた。

けれど私は、誰かのために思って用意したプランを、たった一人でなぞるとき、その一連の出来事が誰かを消費するためのものではなくなるのではないかと感じていた。それはもはや儀式のようだった。ただ、その行動を通して自分はどこか満足していたことも確かであって、その満足が「自己表現」や「美談」として回収されてしまいたくはない。他者がいないからこそ純粋な行為だったのか。それとも、結局は自分を演出しただけだったのか。

② 関係を表現にすること。 A さん

A さんとの映画デートは、形式としては制度がうまく作動した出会いだった。約束の時間に待ち合わせ、映画を観て、言葉を交わす。構造的には何の破綻もなかったし、デートとしての体裁も成立していた。しかし、そのひとつひとつのやりとりの裏側に、私の側の「演出しようとする意志」が常に存在していたように思う。

私は、藝大での授業に A さんを“共同者”として同行させることを計画し、メッセージの文面も丁寧に練った。しかし、その時点で既に、私は関係を編集しはじめていた。同行が断られたとき、私はどこかでほっとした。それは、彼女が協力者として扱われずに済んだことへの安堵であると同時に、彼女が断ってくれたことで、かえってその関係が“対等であった”ように演出された、という錯覚のなかにいたからだ。

だが今にして思えば、そもそも私は“対等であること”すらも、演出の一環として欲していた。その関係が平等で、誰かにとって加害的でなく、純粋であるという“物語”を成立させたかった。だとすれば、私は拒否の自由さえも作品化しようとしていたことになる。相手の主体性が確保されているかどうかではなく、拒否が発生したという事実を“安全な結末”として取り込んでいたのだ。

「誰かと一緒にいられるだけで幸せ」と思う自分がいた。その感情は素朴で個人的なもののようにいて、実際には非常に制度的な感性でもある。誰かと共に在るという状態を価値として、幸福のモデルとして繰り返し消費してきた社会の文脈のなかに、その感情もまたある。私は、そんな「共に在ること」への憧れが、自分の未成熟さや、恋愛の主体たりえない自分を明るみに出してしまったことを、今回のデートを通じて実感した。

「対等でありたい」ということ自体は悪ではないかもしれない。けれど、それを自らの手で演出しようとする時点で、関係はすでに歪んでいる。私は、出会いを制度に預けたと同時に、その制度の一部として他者を配置しようとしてしまっていた。その意味で、断られたという結果は、私の演出が不成立に終わっただけのことかもしれない。私はついさっきまで、これを“良い結末”として回収しようとしていた。しかし果たして、これは本当に“対等な関係”をめぐる一つの実験足り得ていただろうか。それとも、最初から最後まで私だけが舞台を設計し、他者を試していたにすぎなかったのだろうか。私はまた別のかたちで他者を消費してしまっていないか。出会いを求めたつもりが、誰とも深く関わらずに、ただ制度と自意識の間を往復しただけなのではないか。

関係とは何か、対等とは何か、他者とはどう出会えるのか。

その問いだけが、まだ曖昧なまま、私のなかに残っている。